附添人　まあ一寸お待ちなさいよ。一體お養父はどこへ入らしつたんでせう。何より先お祈禱をして戴かなけりや……

アニッシヤ　參りますよ、直に參りますから、皆さんお氣遣なくどうぞ今一盃。

媒妁人　大分暫くですが、一體どこへおいでになつたんでせう。隨分もうお待ちしたがな。

アニッシヤ　なにさ直に參りませう。女子の髪を組むほども暇どりませんよ。どうぞ皆さんお重れ下さい。（酌をする）直に參りますから、其間にどうぞ今一曲伺ひませう。

馭　者　もう待ちくたびれて、歌も種切れさ。

婦人達歌ふ。歌の最中にアキムと共にニキタ跣足で登場。

ニキタ　（父の手を取つて前に押し出し）さあお父さん、這入つて下さい、お父さんがゐなくちや駄目なんですから。

アキム　俺やもう嫌だが――チエ、チエ。

ニキタ　（歌つてゐる人達に）もう止めて下さい。（室中の一同を見渡し）マリンカ、お前も居たな。

媒妁人　（ニキタに）さあ早く、お祈禱をして下さい。

ニキタ　まあ、一寸待つて下さい。（見廻して）アク！リナ、お前も居たな。

媒妁人　何だつてそんなに皆點呼るんです。皆此處より外へ行きませうに。何だか此方は少し變ですれ。

アニッシヤ　まあどうしたんだらう、此人は跣足で！

ニキタ　お父さん貴方も居ますれ。さあ私を見て下さい。信仰深い御一同の中に、私も一人加はつて居ります。正に坐つて居ります。（跪づく）

アニッシヤ　まあ貴方、何をしてゐるんですよ！

媒妁人　一體どうしたんだらう。

マトリヨーナ　なあに皆さん、これは佛蘭西酒をのみ過ぎたからなんですよ。（ニキタに）これ、正氣におなりよ。どうしたんだれ。（引き起さうとすると）

ニキタ　（誰にも構はず、目をすまして眺と見詰めてゐる）信仰深い皆さん！　私は罪人

です、茲で白狀致します

マトリヨーナ　（ニキタの肩を引つ張つて）どうしたんだれお前。氣が違つたんぢやないか。皆さん、これは正氣を無くしたんです、あちらへ連れて行きませう。

ニキタ　（母を肩で押しのけ）まあ構はずに置いて下さい！　れえ、お父さんも熟つく聽いて下さい。第一にはマリンカ！　これを見てくれ。（マリンカの前に額づき）俺はお前に對して、深い罪惡を犯してゐる――お前と夫婦になると約束して置き乍ら、それを反古にし、お前を騙し、とう〳〵棄てゝ了つた。どうぞ、神樣の爲めに、此罪を救してくれ。（又ベツタリ額づく）

アニツシヤ　まあお前さん、何の眞似をしてるんです、柄にもないことして。誰だつてそんな事聞きやしないよ。お起きなさいよ、馬鹿な眞似をしないで。

マトリヨーナ　こりやまあ、何かに魅かされたんだよ。まあ何のことだろ。憑き物で氣が狂つたんだよ。聽りおしよ、妄言云はないでさ。（彼を引つ張る）

ニキタ　（頭を振つて）觸つちやいけない！　（マリンカに）マリンカ、萬望救すと言つてくれ。惡かつた罪は白狀したぢやないか。どうか、神樣に免じて救してくれ！

マリンカ　（兩手を顏にあて、默つてゐる）

アニツシヤ　（ニキタに）お起ちなさいつたらよ、何ですかまあ耻知らずな。何だつて今頃そんな事を持ち出すんです。お止しなさいよ、勿體ぶつて、自分の業曝しですよ！　まあどうしたらいゝんだろ。何を云つてるのか、全で此人は氣が變になつて了つた。

ニキタ　（アニツシヤを衝きのけてアクーリナに向つて）アクーリナ、今度はお前に云ふ。皆樣もどうぞお聽き下さい。アクーリナ、俺は畜生にも劣つた奴だ。お前に對して大罪人だぞ、お前の父は壽命で死んだのぢやない、毒の爲めに非業の最期を遂げたんだ。

アニツシヤ　（びつくりして）嗟困る　まあどうしたらいゝんだらう。

マトリヨーナ　氣が狂つたんだよ。早く彼方へ。（大勢でニキタを連れて行かうとする）

アキム　（手で制して）待つた〳〵。まあお待ちなさい。

ニキタ　アクーリナ。其毒を盛つたのは……これ……この俺だ。後生だ、どうか救してくれ！

アクーリナ　（飛上つて）嘘ですよ！　外の誰だか、妾は知つてますよ。

媒妁人　（アクーリナに）まあ貴方も！　凝乎と坐つておいんなさい。

アキム　あゝ神様、この恐しい罪は！

警　官　縄につけろ！　區長と證人を呼んで來い、覺書を取る必要がある。（ニキタに）立て、こちらへ來い。

アキム　（警官に）まあ、まあ、お役人様、どうぞ今暫く。まだ此子は言ふことがあるさうでございます、どうぞ貴方様。

警　官　（アキムに）親父さん寄るな、靜にしなさい。覺書を取らにやならん。

アキム　いや、ではございませうが、どうぞ今暫く。覺書なんと仰しやらず、これは神様への懺悔でございますから、どうぞ。この子が、これ、この様に罪を悔いて、神様に懺悔を申してゐますのに、覺書の何のと仰しやられては……どうも……

警　官　早く區長を呼んで來い。

アキム　まあ、神様への懺悔をすませて、その上でどの様にも御成敗を……

ニキタ　これアクーリナ。俺はお前に對してまだ〳〵大罪を犯してゐる。俺はお前をそのかした――謝罪のしやうもない事をして了つた、赦してくれ！　（其前に額づく）

アクーリナ　（新郎の前へ出かけて行つて）貴方、二人の縁はこれ丈にして下さい。妾は婚禮は致しません。あの義父に命令かつたからですが、今では妾からお辭退いたします。

警　官　（ニキタに）さあ、今言つたことを尋常にお述べなさい。

ニキタ　まあ暫く。どうぞ悉皆吐かせて下さい。

アキム　（狂悦の態）おゝ、ニキタ、殘らず悔いて了へ。すれば其苦しい胸が輕くなるぞ、神様に懺悔するのだぞ。人間の前で憚ることは無いぞ。それが神様の御意だ。さうだ、さうだ――

ニキタ　其親父に毒をかつた上に、現在其娘を――此犬畜生の人非人は――穢して仕舞ひました。怒ひ親父の權を振つて娘を穢したばかりか、其娘が產んだ子まで――

アクーリナ　さう、それは本當。

ニキタ　穴藏の中でこれを板で締めて――此足をかけると――孩子の息はつまる――小

さい骨がボキ／＼と折れた時には……（泣く）。其上それを埋めました。みんなこの私が只一人でやつたのです。

アクーリナ　嘘ですよ。妾が頼んだんですよ。

ニキタ　辯解は無用だ。斯うなる上は、誰だつて私はもう怖くない。皆様、お察し下さい。（額づく、一同沈默）

警　官　縄につけろ。（アクーリナに）お前等の結婚は無論破れる譯だ。大勢紐を持つてよりたかる。

ニキタ　まあ、今一寸の猶豫を。（父の前に額づいて）お父さん、貴方は肉身の親御です。どうかこの人非人をお赦し下さい！　貴方は、私があの腐つた淫蕩女と係りあつた最初に、仰しやつたことがある——『惡魔に一指を渡せば、全手を摑れるぞ』と、仰しやつた。それを私は聽き入れないで、とう／＼貴方が豫言なさつた通りに、斯んなしだらになつて了ひました。どうぞ此罪は、神様に免じてお赦し下さい！

アキム　（興奮して）おゝおゝ、神様はな、屹度お赦し下さるよ。（我子を抱き締めて）お

前は自身には容赦なくさう懺悔をしたのだから、神様は屹度惡んで下さるよ——屹度赦して下さるよ。さうだ——神様は——

教區長、中の戸口から登場。

教區長　いや證人は澤山居られる。

警　官　さあ直に訊問を開くに依つて。

ニキタ縛につく。

アクーリナ　（ニキタに進み寄つて其そばに坐り）妾が眞個の事を申し上げます。どうぞ妾にお訊き下さい。

ニキタ　（縛られ乍ら）もうお訊問の要はありません。悉皆私が一人で行つた事です。私一人の爲た事ですから、罪人は私一人だけです。どうぞどこへなりお曳き下さい。もう一言も申し上げる事は御座いません！　——（大團圓）——

大正四年六月廿日印刷
大正四年六月廿三日發行

（定價參拾錢）

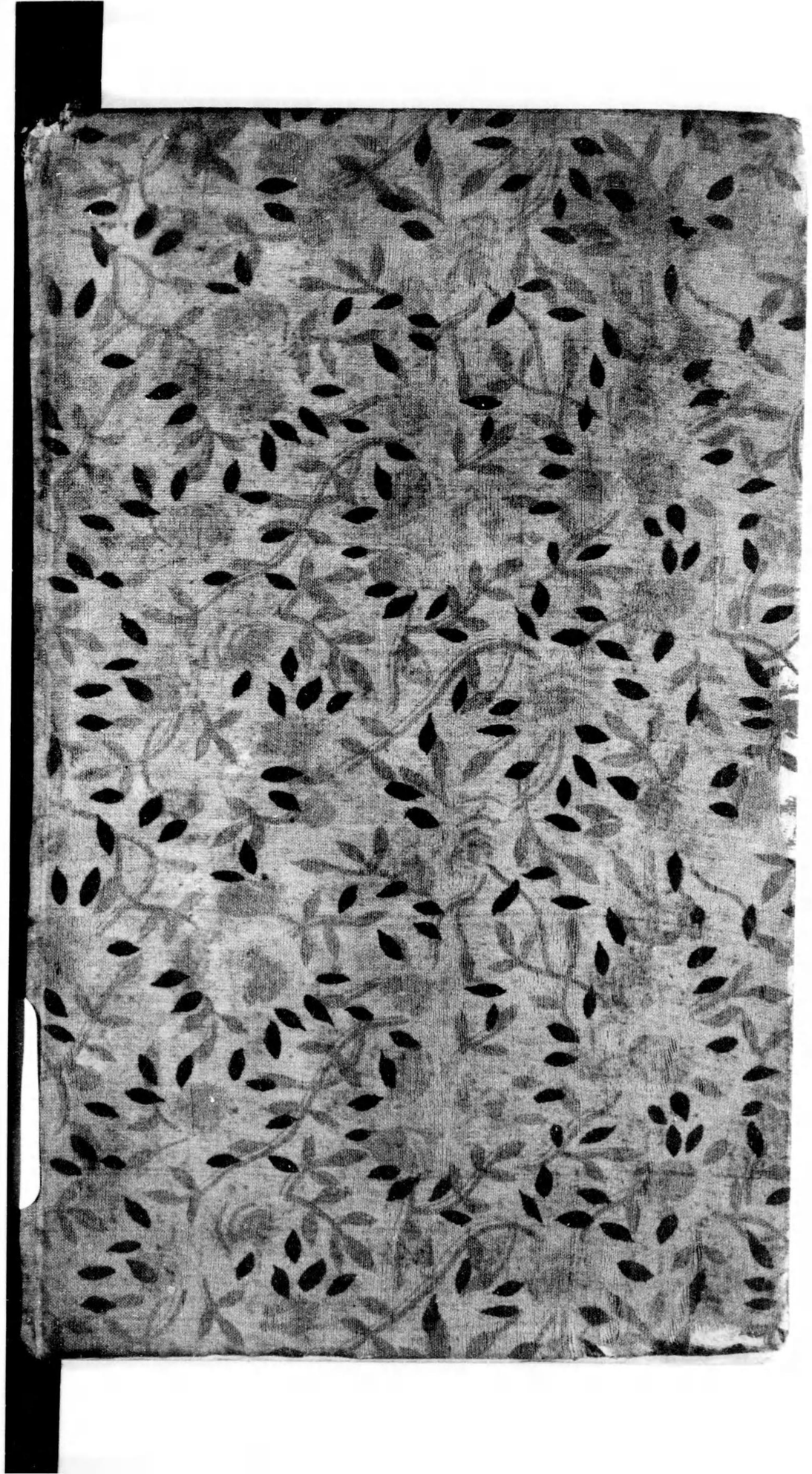
著者　秋庭俊彥

發行者　植竹喜四郎
東京市神田區佐久間町四丁目廿三番地

印刷者　柴田杠一郎
東京市京橋區弓町十三番地

印刷所　千代田印刷株式會社
東京市京橋區弓町十三番地

發行所　東京市神田區佐久間町四丁目二十三番地
振替東京一二九五三番　電話下谷三四一九
植竹書院

不許複製

終